2019-06-10T10:23:23.688加茂みどり

【カテゴリーⅠ】

日本建築学会計画系論文集　第596号，13-19，2005年10月
J. Archit. Plann., AIJ, No. 596, 13-19, Oct., 2005

「個人化」に対応した住戸の空間配列と生活の適合性に関する研究
—実験集合住宅NEXT21における居住実験を通じて—

A STUDY ON THE ADAPTABILITY OF THE SPATIAL UNITS ARRANGEMENT OF THE DWELLING CORRESPONDING TO INDIVIDUALIZATION TO THE LIFESTYLE OF THE DWELLERS
—Through the habitation related experiments conducted in the experimental housing NEXT21—

加茂 みどり*，高田 光雄**
Midori KAMO and Mitsuo TAKADA

This paper aims to inspect if the spatial units arrangement of the dwelling aimed to correspond to individualization would adapt to the lifestyle of the family oriented individualization by examining the way of living of the family through the term of the experiment conducted in the experimental housing NEXT21.
As the result, we could verify the spatial units arrangement of the dwelling adapted to the lifestyle of the family oriented individualization. At the same time, some needs based on a whole family unit were also realized as necessary by the family. We have to consider the adaptability not only to the individualization but also to the diversity of the lifestyles.

Keywords *: Multi-unit housing complex, NEXT21, Way of living, Individualization, Spatial units arrangement, Habitation-related Experiment, Experimental housing*
集合住宅、ＮＥＸＴ 21、住み方、個人化、空間配列、居住実験、実験住宅

1．研究の背景と目的

1-1．家族の「個人化」について

家族の「個人化」は「多様化」と並び、新しい家族の変化の方向を表す概念として定着してきたと言われている[注1)]。その内容は、家族社会学者等により、大きくは以下のように表現されている[注2)]。第一に、家族に属するということは、人々の人生にとって必ずしも自明でも必然でもなく、ある時期に、ある特定の個人的つながりをもつ人々とでつくるものである。第二に、家族生活は、個人が選択するライフスタイルの一つであり、個人にとって必要な要素をもつ家族を創ることが求められる。そして「拘束要因」としての家族から、個人が選択する生き方を助ける「支援要因」としての家族に変化している。第三に、人生におけるライフコースの選択、あるいは日々の生活行為においても、意思決定単位は個人となる。

目黒は、このような変化を「家族が個人化する過程」であるという[注3)]。落合は、「一緒に生活していても、家族全体の効用を最大化しようというのでなく、個人が原則的には各々の効用を最大化しようとしていて、家族のために自分の幸せを長期的に犠牲にするというような選択をしないなら、それは「個人化」した家族と言うべきだ」とし、「家族は諸個人がライフコースの中で取り結ぶネットワークであるとの理解が、今日の家族社会学の認識であると言っても間違いではない」としている[注4)]。さらに伊田は、男女二分法や結婚制度に対する批判のニュアンスを込め、個人を「シングル」と呼び、「シングルは、そうした「家族」というフィルターを通さずに、直接的に社会の中の構成員として権利と義務を持つもの」とした上で、「性別や結婚に無関係に個々人が生きられる社会」として「シングル単位社会」を提唱している[注5)]。

また、西川は家族の変容を住宅と関係づけて説明している[注6)]。西川は「家族モデルの旧二重構造：『家』家族／『家庭』家族」として、それに対応するのは「住まいモデルの旧二重構造：『いろり端のある家』／『茶の間のある家』」であり、「家族モデルの新二重構造：『家庭』家族／個人」として、それに対応するのは「住まいモデルの新二重構造：『リビングのある家』／『ワンルーム』」であるとした。そしてこの新旧の２重構造が入れ替わるのは、リビングルームが世の中に定着し、ワンルームマンションが出現し始めた1975年頃としている。西川は「家」から「家庭」が浮遊・離脱し、析出したのと同じように、今後、「家庭」から「個人」が析出し、「リビングのある家」からワンルームが離脱していく可能性を示唆している。

社会学等の立場からこのような家族の変容が指摘されるのと並行して、住宅計画学の立場からも、従来の住宅計画が、住まい手と住まいの多様な関係に対応しきれていないことなどが指摘されてきた。

* 京都大学大学院工学研究科　博士後期課程・修士(工学)
大阪ガス㈱
Graduate Student, Department of Architecture and Architectural Systems, Graduate School of Engineering, Kyoto Univ., M. Eng.
Osakagas Co., Ltd.

** 京都大学大学院工学研究科　教授・博士(工学)
Prof., Department of Urban and Environmental Engineering, Graduate School of Engineering, Kyoto Univ., Dr. Eng.

2019-06-10T10:23:23.688加茂みどり

未だ固定的な概念として使用されている「世帯」を単位として想定する限り、「コレクティブハウジング」・「ネットワーク居住」・「非血縁・非婚姻同居」などの多様な居住形態に対応した住宅を考えることはできない。このような視点から「個人化」も含んだ住宅計画のあり方に関する議論が活発化し、日本建築学会においても、1999年大会において「家族・個人・社会と住まい―ヒューマンコンタクトの在り方と住宅計画―」と題してパネルディスカッションが開催され議論されている[注7)]。

住まい手と住まいの多様な関係に対応することとは、住宅における家族・個人・社会の多様な関係性をデザインすることに他ならない。そして住宅における家族・個人・社会の関係性のデザインは、家族の共用室（家族）・個室（個人）・外部空間（社会）という空間の配列に端的に表現される可能性がある。

本研究では、住戸における家族の共用室（家族）・個室（個人）・外部空間（社会）のアクセスに沿った並び方を空間配列と呼ぶこととする。

1-2.「個人化」に対応した住宅提案

「個人化」を意識した住宅提案も多くなされている。1968年に黒沢隆が早くも「近代住居の崩壊」について予測し、「個室群住居」を提案した[注8)]。山本理顕が1992年に提示した図式では、同じ住宅に住む家族を共同体と捉え、その共同体の共同の場として共用室がある。空間の配列を「社会－個人－家族」と考え、共用室には個室を通って入る[注9)]。渡辺真理・木下庸子は集住体の構成要素としてC(コモン：集住体および住まいの共有領域)、S（サテライト：個の領域)、そしてそれらを連結するP（パス）をあげ、それらから構成される住まいをCPSハウジングと名づけた。CPSハウジングは、「非核家族の家」、または「n LDKではない住まい」とされ、CPSダイアグラムにより表記される[注10)]。1998年に竣工した、妹島和世によって設計されたハイタウン北方・妹島棟においては、住戸の玄関とは別に、個室にも外部からの出入り口が設けられている。

これらの住宅や住宅提案に共通した特徴は、個室が外部空間と直接つながる空間配列となっていることがあげられる。

1-3. 研究の目的

以上のように「個人化」が家族の変容として注目されているのを踏まえ、「大阪ガス実験集合住宅ＮＥＸＴ21」（以下、ＮＥＸＴ21）[注11)]では、一住戸を「個人化」に対応した住宅として計画し、社員が実際に居住するという実験を実施した。本研究ではこの住戸を研究対象とし、居住実験期間中の住み方を調査分析し、「個人化」への対応をめざした住宅における空間配列が、「個人化」した家族の生活と適合するかどうかを検証することを目的としている。

2．既往研究と本研究の位置づけ

「個人化」に関する住宅研究としては、筆者らの研究室において、集合住宅の空間構造に関する一連の研究を行い、自立した個人間の関係を維持することのできる空間構造モデルを提示している。また「生活単位の個人化」に対応した住宅計画手法として、シナリオ・アプローチによる住宅計画手法の開発を行い、共働き夫婦や単身共同居住者にこの手法を適用することにより、「生活単位の個人化」という視点からみた居住空間の構成原理について考察している[注12)]。

住戸空間の配列に関する研究としては、坂本一成らの一連の研究があり、空間の構成単位や配列の類型化、空間の構成形式等について論じている[注13)]。

これらの研究に対し、本研究では調査対象住戸に居住する家族の住まい方を詳細に記録・分析する。ＮＥＸＴ２１においては、実際に社員が居住する実験が16戸の住戸で行われ、1994年4月より1999年3月までの5年間が第1フェーズ居住実験、2000年4月から2005年3月までの5年間が第2フェーズ居住実験と位置づけられている。それら一連の居住実験には、将来の住宅に対する考察から提案を行う提案研究と、実際に居住することでそれらの提案に対する検証を行う実証研究があるが、本研究は「個人化」に対応した住宅として建設された住戸を対象に行うＮＥＸＴ２１の実証研究の一つである。

また実際の住み方を調査対象とすることから、「住み方研究」[注14)]の一つと位置づけることが出来る。しかし本研究は多くの事例を定量的に分析する量的研究ではなく、一事例から詳細なデータを継続的に採取し、分析を行うことに特色がある。

3．調査および調査対象の概要

3-1. 調査の概要

本研究の調査期間は1994年4月の入居から1999年3月の退去までの第1フェーズの5年間である。調査は、調査1：調査対象住戸における生活・住み方に関するアンケート調査（留置自記式)、調査2：補足のための面接による聞き取り調査、調査3：住戸内写真撮影とスケッチによる家具の設置状況調査である。調査1は94年から97年の毎年10月から翌年3月にかけて数回に分けて実施し、その後に調査2および調査3を実施している（**表1**）。継続的な調査を実施することで、調査期間内の住戸内の状態の変化を詳細に記録し、家族の生活状況の変化と住まい方、住戸に対する評価等を明らかにすることとした。尚、調査1は適宜長男・長女からも回答を得ているが、調査2は夫妻に対してのみ実施している。

3-2. 調査対象住戸「自立家族の家」における提案

調査対象住戸は、ＮＥＸＴ 21の3階に位置する「自立家族の家」（設計：シーラカンス）であり、前述の山本の図式とほぼ同じ図式に

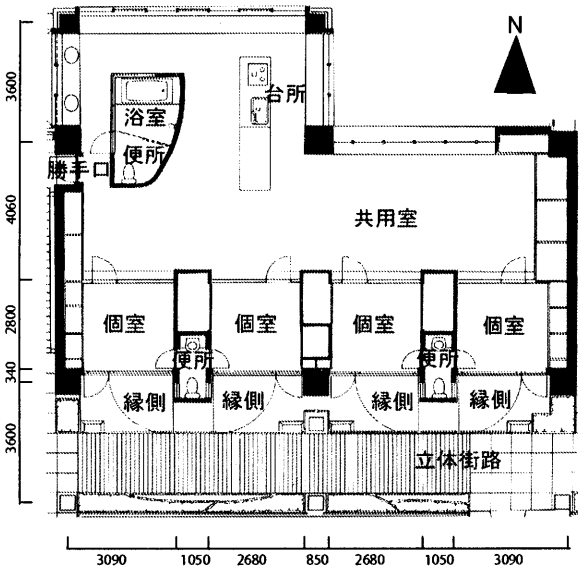


図1　「自立家族の家」平面図
（設計：シーラカンス）

2019-06-10T10:23:23.688加茂みどり

表すことができる平面計画を持つ。

「自立家族の家」では、個人の自立を重視する家族への対応をテーマとした空間が提案されている[注15)]。立体街路（一般の共用廊下にあたる）に面して個室4部屋が並び、それぞれに出入り口がある。外からは、個室を通って住戸内に入り、奥に家族の共用室がある。共用室には小さな勝手口がある。個室は、縁側、可動フェンスを介して立体街路とつながり、跳ね上げ式のドアを介して家族の共用室とつながる。個室横には洗面所、トイレがある。「自立家族の家」の平面図を**図1**に示す。

この住戸の設計においては、「自立家族の家」というテーマに対して、「子供自身が自立し、なおかつ夫婦というのも夫婦として捉えるのではなく、個人として自立しているような家族を設定」した設計が行われた。「今までの子供中心、夫婦中心、夫婦プラス子供といった枠組みから、全然そうじゃない人たち、お年寄りと誰かとか、別れて一人になっているとか、そういう人たちも包含」することが意図された。また、「現在、n LDKの住宅プランは、個室が寝室として、玄関から入って一番奥に配置されている。実はこの一般形からはみ出す家族も出てきているのではないか。家族を構成している個人は、家族に属していると同時に、学校、会社、サークルなどに属している。また、電話やFAX、TV、コンピュータネットワークといったメディアによるつながりにも組み込まれている。そうした個人が家族という形式の共同生活をする場合、従来とは逆に個室はもっと社会を向かい合う位置に置かれるだろう。さらに自立した個人という考え方では夫婦寝室、子ども部屋といった名前はなくなって、すべての個室は等価なものとなる。家族という単位は、強制されない選択可能なものにさえなるだろう。」というように、空間の配列は社会（立体街路）－個人（個室）－家族（共用室）となっている。さらに、「1人がその個室と奥のパブリックスペースを専有してしまって、あとの3人は跳ね上げ式の建具のところ（個室と共用室の境界）でシャットアウトされる。それでも生活が可能な状況をつくりたかったということです。子供が結婚していなくなったスペースを貸すこともできる。つまり下宿屋にすることもできる。」ことも意図された。

3-3. 調査対象家族のプロフィール

この住戸の住まい手は、4人の核家族で、入居時に夫は41歳・会社員、妻は41歳・専業主婦、長女は15歳・高校1年生、長男は13歳・中学2年生である。入居直前は、72㎡（3LDK＋納戸）の分譲マンションに12年間居住していた。自分たちが「まとまりの良い家族で、かつ個人の活動もあるので、コンセプトが自分たちに合っている」と設計の趣旨に賛同し、「子供たちが強く希望」したこともあり、入居に応募している。

4．調査対象住戸における住まい方

4-1. 家族の住まい方の概要

調査期間における家族の住まい方については、「個人・家族・接客に関する回答の主な内容」、「家具配置・個室用途・家族構成員の住戸へのアクセス」、「生活行為を行う場所」を概要として**表2**に示す。「個人・家族・接客に関する回答の主な内容」は、調査2で採取できた回答を内容のまとまりごとに分類し、家族・個人・接客に関わるものを抽出し重複するものを除いた110項目のうち、住戸に関わるものを抽出した51項目を調査ごとに示してしている。「家具配置・個室用途・家族構成員の住戸へのアクセス」、「生活行為を行う場所」は、調査1の回答および調査3の結果から筆者が整理したものである。

表1　調査概要

	第1回	第2回	第3回	第4回
調査1	1994年10月～翌3月	1995年10月～翌3月	1996年10月～翌3月	1997年10月～翌3月
調査2	1995年3月1日	1996年1月18日	1997年7月30日	1998年6月3日
調査3	1995年3月11日	1996年1月18日	1997年7月30日	1998年6月3日

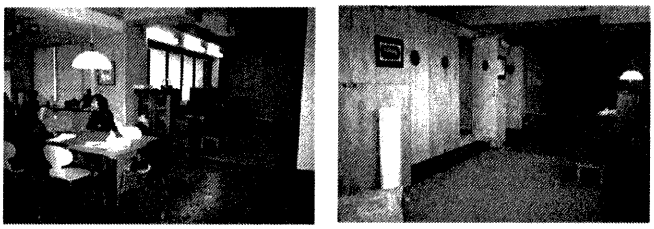


図2　「自立家族の家」共用室写真

家族は共用室を「リビング」と呼び、キッチン横のダイニングテーブル周りを「ダイニング」と呼んでいる。また各自の個室は「（誰々の）個室」と呼んでいる。

家族の生活の大きな変化としては、95年3月より、妻がパートで働き始めた。また、95年4月より長女が高校2年生になり、受験勉強を始めた。96年4月には、高校3年生になった長女の勉強しやすい環境を確保するため、長女の個室をテレビから最も遠い場所に移動した。97年4月より長女が大学に通うため東京で下宿を始め、この住戸に居住する家族は3人となった。その後は、長女の個室と合わせて、長男が2室の個室を使用するようになった。

4-2. 個室の利用に関して

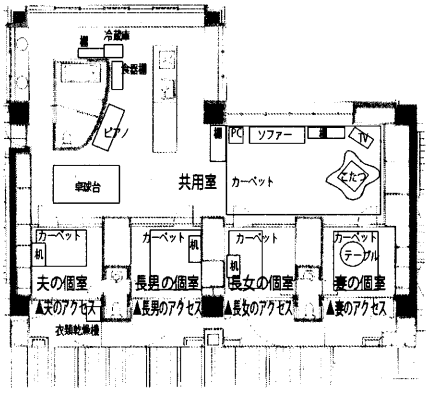
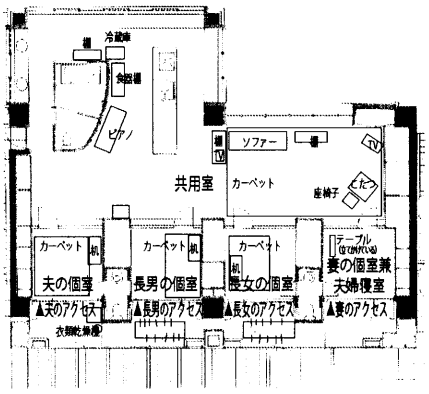
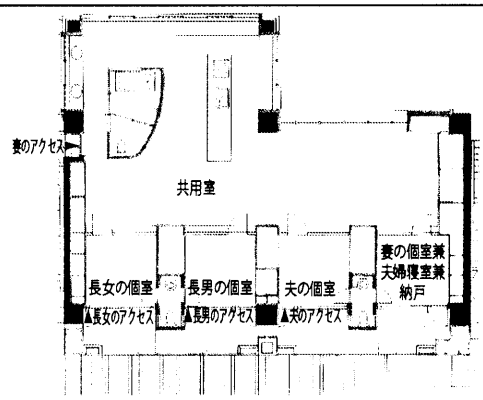
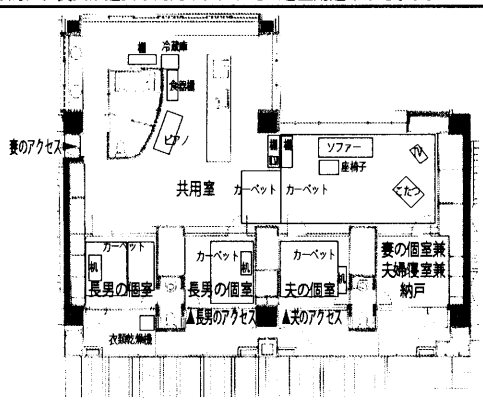
まず、妻以外の家族の、個人の活動や個室の利用状況をみると、住戸外からの出入りには、全居住期間を通じてそれぞれの個室の出入り口を使用し、個室では読書や勉強など個人の活動を行っていた。

1回目の調査の結果では、「個室は、外での自分と家での自分が変身する場所」と認識している。「（外出から）帰って、自分の部屋で着替えてから、『ただいま』と言ってリビングに入る。」と答えている。そして「家族－自分（個人）－社会の関係が住んでみてはじめて分かった。」と答えている。2回目の調査以降も、夫・長女・長男については自分の個室を自分の個人的な作業等に使用し、出入りにも個室を使用していた。就寝については、長女・長男は個室での就寝を行っていた。夫については、入居してから1年間は自分の個室で就寝していたが、2年目以降は妻の個室で就寝している。しかし夫の個室はその後も夫だけの個室として、夫の個人の活動に使用された。

しかし、夫や長女・長男が個室や個室からの出入りを評価しているのに対し、妻だけは1回目の調査において、「主婦に個室はいらない。自立していない。昼間はすべてを1人で使うから夜は皆と過ごしたい。」と答えている。入居2年目には自分の個室を夫婦の寝室としても使用し、足りない収納を補うために、納戸としても使用している。また、住戸への出入りに関しても、3回目の調査以降は共用室の勝手口も使用するようになっている。居住期間を通じて個室は殆ど使用せず、就寝に使用するのみである。「みんなの分の買い物の荷物を持って、なぜ私は個室から家に入らないといけないのかと思う」（3回目調査）という発言に見られるように、個室から住戸外に出入りすることに対して、不満を持っている。

2019-06-10T10:23:23.688加茂みどり

表２　303 住戸における調査結果の概要

		個人・家族・接客に関する回答の主な内容	家具配置・個室用途・家族構成員の住戸へのアクセス	生活行為を行う場所	
1回目（1995）	個人	最もくつろぐ、脱力する空間がリビングになった。 間食・昼寝はリビングでする。 個室は外での自分と家での自分が変身する場所。帰って個室で着替えてから、「ただいま」と言ってリビングに入る。 家族－自分－社会の関係が住んでみて分かった。 主婦に個室はいらない。自立していない。昼間は１人なので、夜は皆と過ごしたい。		食事	共用室
				就寝	各自の個室
	家族	コミュニケーションをくずさず個人の生活を確保できてよい。 家族がだまって出て行って、わからないことがある。 完全に一人ではなく、リビングや外部の気配を感じながらいられるのがよい。 家族間プライバシーはないが、困っていない。		個人作業	夫と長男、長女は自分の個室、妻は共用室
				くつろぎ	共用室
	接客	玄関先で済ませるべき用事がしにくい。 宅急便や郵便の配達時に入り口が分かり難く困る。 開けると室内が丸見えになって困る。 妻の個室を応接室にしようかと考えている。 友人は各自の個室から連れてくる。 誰かがリビングで接客しているとき、他の家族は個室に逃げる。		接客	夫と妻は共用室、長女・長男は共用室と個室
				アクセス	各自の個室
2回目（1996）	個人	妻は仕事に出るようになった。 昼間１人で家で居ることが殆んどなくなった。 夫は、自分の空間を通って外と通じることをよかったと感じている。 長女は受験勉強を始めた。		食事	共用室
				就寝	妻と長女、長男は自分の個室、夫は妻の個室
	家族	以前はみんなでテレビを見たり、ゲームをしたり、くつろいでいたが、バラバラの時もある。気配はいつもある。 夫も妻の個室で就寝するようになった。 １人になれる空間は妻以外はあるが、プライバシーはあまり守られていない。		個人作業	夫と長男、長女は自分の個室、妻は共用室
				くつろぎ	共用室
	接客	長男と長女の友人は個室、夫婦の客は勝手口から入る。 改まった応接がないので困ることがある。 来客時掃除しないといけないので苦痛に感じる。 トイレに客が行く時に個室を通らないと行けない。 来客は全て食事を伴う。キッチンが丸見えなので６時くらいまでいられると、食べていきますかと言ってしまう。		接客	夫と妻は共用室、長女・長男は共用室と個室
				アクセス	各自の個室
3回目（1997）	個人	夫の個室は夫の書斎兼着替え部屋となっている。 くつの置き場、着替え、出入りは従来通り。 個室から直接家に入るのは便利だったが、やはり無理があるとも感じている。	 アンケート調査（1997 年３月）と家具の設置状況調査（1997 年７月）の間に、長女が退去したため、アクセスと室用途のみを示す。	食事	共用室
				就寝	妻と長女、長男は自分の個室、夫は妻の個室
	家族	受験のため、長女の個室はテレビから遠い部屋にした。 妻は、みんなの分の買い物の荷物を持って、なぜ個室から家に入らないといけないのかと疑問に思っている。 家事は妻が８～９割負担している。 長女が塾に通っているため、夕食がそろわないことがある。		個人作業	夫と長男、長女は自分の個室、妻は共用室
				くつろぎ	共用室
	接客	長男の友人のみ長男の部屋から入る。他の来客は勝手口から入る。 妻が働き出して、妻の個室を応接間にする案はなくなった。 長女が受験期ということもあり、来客が減った。 家の中で丸見え状態なので、来客の時気を使う。 来客時掃除しないといけないので苦痛。 トイレに行く時個室を通るのがいや。		接客	夫と妻は共用室、長男は共用室と個室、長女（受験期）は来客なし
				アクセス	夫と長男、長女は自分の個室、妻は自分の個室と勝手口
4回目（1998）	個人	長女が退去してから、長男が個室の２室を自分の部屋として使うようになった。ギター etc. の楽器を自室で楽しめるようになった。 長男は勉強、ギター、マンガを読む以外はリビングにいる。 夫は個室のパソコンの前にいることが多い。 妻は個室に掃除と寝るとき以外は入らない。	 妻の個室兼夫婦寝室は、納戸も兼ねているため、住まい手の希望により家具配置調査及び写真撮影を行わなかった。	食事	共用室
				就寝	妻と長男は自分の個室、夫は妻の個室
	家族	長女が下宿を始め、同居家族は３人になった。 居間で家族全員がコミュニケーションを持つというコンセプトは、自分たちに合っていた。 妻は玄関は大切、帰るときに恥ずかしい。		個人作業	夫と長男は自分の個室、妻は共用室
				くつろぎ	共用室
	接客	プライバシーが確保できないから、人を呼べない。 本当は客を呼ぶ方なのに、人を呼ばない５年だった。 家の中が丸見えになることが、社会的閉鎖性につながっている。 玄関がなく、個室からの入室のため、来客時に格好が悪い。		接客	夫と妻は共用室、長男は共用室と個室
				アクセス	夫と長男は自分の個室、妻は自分の個室と勝手口

※表中の住まい手による回答は、住まい手の記述・口述の通りに表記しているため、用語の不整合や不明な用語がある。（例えば１回目調査の個人欄の１行目「脱力する空間」とは、「力を抜いてくつろげる空間」という意味である。）

2019-06-10T10:23:23.688加茂みどり

表３　妻の家事負担割合

家事の項目	共用室の掃除	洗濯	共同の食事	妻の食事	妻以外の食事
割合	９割	10割	10割	10割	９割

＊３回目調査１における妻の回答による。
＊共同の食事は家族一緒に食べる食事のための炊事、妻の食事は妻が１人で食事をするための炊事、妻以外の食事は妻以外の家族が１人で食事をするための炊事を指す。

また、長女・長男のみ、個室で接客をしている。また、入居して１年間は友人を各自の個室から連れて来ていたが、２年目以降は、夫婦の友人のみ勝手口から住戸に入るようになった[注16)]。

4-3.　共用室の利用に関して

居住期間を通じて、家族全員が共用室で食事をし、くつろぐ。団欒し、コミュニケーションを持つのも共用室である。住戸の中で、「コミュニケーションをくずさず、個人の生活を確保できてよい」（１回目調査）と評価されている。

また、妻は、他の家族に対するサービスとしての家事を共用室で行っている。妻は家族の食事・洗濯・共用室の掃除について９割以上の負担を担っている（**表３**）。そのすべてを共用室で行っていた。

来客時の接客空間として、夫と妻は共用室を使用し、長女・長男も個室とともに共用室も接客に使用していた。

１回目の調査時には、「誰かが共用室で接客している時は、他の家族は自分の個室に逃げる」と答えていたが、２回目の調査時には、「改まった応接室がないので困ることもある」と答えており、さらに３回目の調査以降では、「家の中で丸見え状態なので来客の時気を使う」と感じ、来客が減る傾向がある。

また、この住戸に玄関がないことについては、妻の大きな不満となっている。妻は「（出入りに使用していた勝手口から）帰宅する時に恥ずかしい」（４回目調査）と感じていた。さらに、家族の玄関がないことは、「宅配便や郵便の配達時に困ることがある」（１回目調査）と答え、「来客時に格好が悪い」（４回目調査）と感じていた。

５．家族の生活と空間配列の適合について

5-1.　家族構成員それぞれに適合した空間配列

前述のように、個室からの出入りや、社会（立体街路）－個人（個室）－家族（共用室）という空間配列に対して、妻以外の家族はおおむね肯定的であり、空間の利用も、この配列に即したものであった。夫・長女・長男に関しては、個室から住戸の外に出入りし、個室で個人的な作業をし、共用室で食事・団欒を行っている。

しかし、妻は否定的であった。自分の個室は不要だと感じ、２年目以降は個室を納戸・夫婦寝室と兼用し、来客の出入りには勝手口を使用するようになった。さらに３回目の調査以降は、自らも出入りには勝手口も使用するようになった。つまり住戸の外からは、勝手口を通じてまず家族の共用室に入り、そして奥に個室を置いたことになる。これは、空間配列に着目すれば、社会（立体街路）－個人（個室）－家族（共用室）という当初の配列の中で、家族の共用室と個人の個室の位置を変更し、結果として配列を社会（立体街路）－家族（共用室）－夫婦（主寝室）と変更したことになる。

さらに夫に関しても、日常生活での住戸の使い方における空間配列は、社会（立体街路）－個人（個室）－家族（共用室）であったが、来客は共用室の勝手口から住戸に通している。

このように、同じ家族であっても、個人によって、また状況によって、適合する住戸の空間配列が異なる場合のあることが確認できた。

5-2.　日常生活における空間配列

前述のように、妻以外の家族構成員の日常生活における空間配列は、社会（立体街路）－個人（個室）－家族（共用室）であったのに対し、妻については社会（立体街路）－家族（共用室）－個人（個室）であったと考えられる。

空間配列に関する妻以外の家族の発言では、「家族－自分（個人）－社会の関係が住んでみてはじめて分かった。」（１回目調査）「個室は、外での自分と家での自分が変身する場所」（１回目調査）「自分の空間を通って外と通じることをよかったと感じている」（２回目調査）というように、「外（社会）での自分」を意識した発言や、自分（個人）と社会との直接的なつながりを認識した発言があった。

しかし妻にはそのような発言はみられなかった。妻については「主婦に個室はいらない。自立していない。」（１回目調査）という発言や、「みんなの分の買い物の荷物を持って、なぜ私は個室から家に入らないといけないのかと思う」（３回目調査）という発言があった。日常の多くの時間を家事に割く妻は、社会との関係を重視する存在というよりは、家族に対するサービスを供給する、家族との関係を重視する存在であったと考えられる。そのことと、自分の個室が直接外部空間とつながるという空間配列が適合しなかったことは、少なからぬ関係があると推測することができる。

5-3.　来客時における空間配列

長女や長男が、自分の友人を自分の個室から住戸に通すのに対し、夫婦は来客を勝手口から通していた。来客時の空間配列が、長女・長男が社会（立体街路）－個人（個室）－家族（共用室）であったのに対し、夫と妻は社会（立体街路）－家族（共用室）－個人（個室）であったと考えられる。

来客に関しては、妻から「トイレに行くとき個室を通るのがいや」（３回目調査）という発言があり、主に妻が個室を客に見せるのを嫌がっていたことがわかる。その結果来客は勝手口から通されるようになるが、「玄関がなく、個室からの入室のため、来客時に格好が悪い」（４回目調査）「玄関は大切だと思う。帰るときに恥ずかしい」（４回目調査）という発言のように、来客を通す空間として玄関を重視していたこともわかる。今回の調査対象家族は、住戸平面の設計主旨に賛同した家族であったが、必ずしも「個人化」を志向しない家族構成員（妻）が存在し、その結果、玄関に対するニーズが顕在化した。また、ある程度「個人化」を志向していると考えられる夫も妻の意見に賛同していることから、「個人化」が進み、家族が個人として直接社会とつながるようになるとしても、家族としての社会とのつながりが消滅するわけではなく、「個人化」した家族における玄関の意義がなくなるとは限らないことが確認できた。

5-4.　共用室の利用と空間配列

家族は共用室で食事をし、くつろぎ、団欒をしている。このことで家族のコミュニケーションは良好に保たれていた。共用室は、家族をつなぐ空間として、有効に利用されていたと考えられる。

しかし、接客行為における共用室の利用の仕方には、家族の不満を残していた。「誰かの接客時に、他の家族が自分の個室に逃げる」（１回目調査）ということは、共用室であるはずのリビングが、一時的に共用室ではなく、接客している家族個人の空間となっていると考えられる。この時の空間配列は社会（立体街路）－個人（個室）となっている。この時点では、家族の了承のもとに、このような使用がな

2019-06-10T10:23:23.688加茂みどり

されたと考えられる。これは設計時の想定通りの使い方であったのだが、共用室を個人の接客空間と兼ねることは、普段共用室として家族が使用している空間が来客から丸見えになる。また、個人の来客ではなく、夫婦の知人など、家族として来客を迎える場合は、個室を見られたくないことから勝手口より招き入れ、接客には家族の共用室を使っていた。しかし来客がトイレに行く時には個室のトイレか、または浴室のトイレを使用せざるを得ず、結局個室のトイレを使用していた。そして接客時の家族のプライバシーが確保できないことから、徐々に来客が減る結果となった。

この住戸は、コンセプトに忠実に、純粋な「社会（立体街路）－個人（個室）－家族（共用室）」の空間配列が保持されている。しかし実際には個室を見せたくない来客もあること、共用室にも来客に見られたくないプライバシーが存在すること、そのような来客が使用するトイレや洗面が必要であることから、この住戸の空間配列では、接客空間に対するニーズを満たすことが難しかったと考えられる。

6．結論

本稿では、調査対象住戸における住み方を明らかにすることにより、以下の４点を確認することができた。

①妻以外の、「個人化」を志向する個人と考えられる家族構成員には社会（立体街路）－個人（個室）－家族（共用室）という空間配列は適合した。

②しかし、社会との関係よりも家族との関係を重視する妻には、社会（立体街路）－個人（個室）－家族（共用室）という空間配列は適合しなかった。

③個人化した家族が個人として直接社会とつながるとしても、少なくとも今回の調査では玄関に対するニーズが存在した。そして、玄関がないことが家族の不満となった。

④この住戸の空間配列では接客空間に対するニーズが満たされず、家族の接客行為に不都合が生じた。

①②から、この住戸の空間配列は「個人化」した家族の生活に対応していることを、「個人化」を志向する家族への適合・そうでない家族への不適合という両面から検証することができた。

しかし②③④より、この家族が、住戸の設計趣旨に賛同し自ら希望して入居したにもかかわらず、徹底して「個人化」した家族ではなく、家族としてのニーズも併せ持っていることがわかった。そして必ずしも「個人化」を志向しない家族構成員の生活への適合や、玄関や接客空間という家族のニーズには、この住戸では対応しきれなかったこともわかった。つまり、この住戸で実現できる空間配列で、すべてのニーズを満たすのには無理があったといえる。

このことから、実際の家族は「個人化」しているとしてもその程度は様々であり、同じ家族であっても個人によって、または状況によって、生活が異なる可能性もあることが推測され、「個人化」した家族の生活に対応すると同時に、そのような多様な生活への対応も合わせて考慮されるべきだと考えられる。

注記

1）文献１）～３）など
2）文献１）～８）など
3）文献４）
4）文献５）
5）文献６）、７）
6）文献12）、13）
7）文献14）
8）文献15）
9）文献16）
10）文献17）
11）ＮＥＸＴ21は大阪ガス㈱により企画・建設され、1993年に竣工した。環境共生、長期耐久性、可変性など多くのテーマのもとに計画が進められた。地下１階、地上６階の鉄筋コンクリート造、18戸の集合住宅である。３階以上の16戸で居住実験が実施されている。
12）文献23）～27）
13）文献28）～36）など
14）文献38）～49）他多数。
15）以下の「自立家族の家」のコンセプトについては、文献21）・22）などに掲載された堀場弘氏（シーラカンス）、三瓶満真氏（同）の発言による。
16）今回は、分析対象としなかったが、跳ね上げ式のドアの使用状況については、夫は常開、妻と長男は常閉、長女は状況によって開閉していた。

参考文献

1）落合恵美子：２１世紀家族へ（第２版）、有斐閣、1997
2）落合恵美子：２１世紀家族へ（第３版）、有斐閣、2004
3）岩上真珠：ライフコースとジェンダーで読む家族、有斐閣、2003
4）目黒依子：個人化する家族、勁草書房、1987
5）落合恵美子：近代家族の曲がり角、角川書店、2000
6）伊田広行：シングル単位の社会論―ジェンダー・フリーな社会へ―、世界思想社、1998
7）伊田広行：シングル単位の家族・恋愛論―ジェンダー・フリーな関係へ―、世界思想社、1998
8）広原盛明、岩崎信彦、高田光雄編著：少子高齢時代の都市住宅学、ミネルヴァ書房、2002
9）上野千鶴子：近代家族の成立と終焉、岩波書店、1994
10）山田昌弘：近代家族のゆくえ、新曜社、1994
11）上野千鶴子他：〈家族〉の社会学（岩波講座「現代社会学」第19巻）、岩波書店、1996
12）西川祐子：借家と持ち家の文学史―「私」のうつわの物語、三省堂、1998
13）西川祐子：住まいと家族をめぐる物語、集英社新書、2004
14）日本建築学会編：家族・個人・社会と住まい―ヒューマンコンタクトの在り方と住宅計画―、1999年度日本建築学会大会（中国）建築計画部門パネルディスカッション資料、1999
15）黒沢隆：個室群住居、住まいの図書館、1997
16）山本理顕：住居論、住まいの図書館、1993
17）渡辺真理、木下庸子：孤の集住体、住まいの図書館、1998
18）鈴木成文：住まいの計画住まいの文化、彰国社、1988
19）上野千鶴子：家族を容れるハコ　家族を超えるハコ、平凡社、2002
20）鈴木成文他：「５１Ｃ」家族を容れるハコの戦後と現在、平凡社、2004
21）挑戦する住宅、『建築知識』エクスナレッジ、1996年７月号
22）住宅の二段階供給方式を可能にする都市型立体インフラストラクチャーの提案、『GA　JAPAN　06』A.D.A.EDITA　Tokyo、1994
23）安枝英俊、高田光雄：集合住宅の空間構造に関する基礎的研究、日本建築学会計画系論文集　No.523、pp.117～123、1999.9
24）安枝英俊、高田光雄：自立した個人間の関係を維持することのできる空間構造モデル－集合住宅の空間構造に関する基礎的研究　その２－、日本建築学会計画系論文集　No.564、pp.107～112、2003.2
25）安枝英俊、高田光雄：生活単位の個人化という視点からみた共働き夫婦の居住空間の構成原理に関する考察－集合住宅の空間構造に関する基礎的研究　その３－、日本建築学会計画系論文集　No.568、pp.17～24、2003.6
26）安枝英俊、高田光雄：生活単位の個人化という視点からみた単身共同居住者の居住空間の構成原理に関する考察－集合住宅の空間構造に関する基礎的研究　その４－、日本建築学会計画系論文集　No.574、pp.9～16、2003.12
27）安枝英俊：生活単位の個人化に対応した住宅計画に関する研究、京都大学学位論文、2005. 3
28）塚本由晴、坂本一成：現代日本の住宅作品における空間の分割－住宅建築の構成形式に関する研究－、日本建築学会計画系論文集　No.478、pp.99～106、1995.12
29）塚本由晴、奥矢恵、坂本一成：住宅作品における架構表現による構成単位

2019-06-10T10:23:23.688加茂みどり

の分節－住宅建築の構成形式に関する研究－、日本建築学会計画系論文集 No.480、pp.113 ～ 121、1996.2
30）足立真、坂本一成、奥山信一：集合住宅の空間構成における多様性・均質性－現代日本の集合住宅における構成単位とその集合形式に関する研究－日本建築学会計画系論文集、No.490、pp.93 ～ 102、1996.12
31）足立真、坂本一成：住戸の集合と外部空間の配列による構成形式－現代日本の集合住宅における構成単位とその集合形式に関する研究　その２－日本建築学会計画系論文集、No.522、pp.179 ～ 186、1999.8
32）足立真、坂本一成：要素の配列による集合住宅の外形構成－現代日本の集合住宅における構成単位とその集合形式に関する研究　その３－日本建築学会計画系論文集、No.530、pp.135 ～ 142、2000.4
33）足立真、坂本一成：外部空間の接続と配列による集合住宅の構成形式－現代日本の集合住宅における構成単位とその集合形式に関する研究　その４－日本建築学会計画系論文集、No.538、pp.101 ～ 108、2000.12
34）小川次郎、小野田環、坂本一成：外形ヴォリュームと室の配列による建築の構成－現代日本の住宅作品における内外の関係による構成形式－、日本建築学会計画系論文集　No.537、pp.117 ～ 123、2000.11
35）岡村航太、小川次郎、坂本一成：外部空間の配列と持続からみた都市型住宅作品の構成－現代日本の住宅作品における内外の関係による構成形式（２）－、日本建築学会計画系論文集　No.552、pp.141 ～ 146、2002.2
36）美濃部幸郎、坂本一成、寺内美紀子：外部空間の分節からみた分棟建築の構成－ヴォリュームの配列による現代建築の統合形式に関する研究－、日本建築学会計画系論文集　No.552、pp.147 ～ 154、2002.2
37）日本建築学会編：集合住宅計画研究史、日本建築学会、1989
38）鈴木成文：順応型住宅の研究、新住宅普及会住宅建築研究所報、No. 1、pp. 1 ～ 7、1974、同 No. 2、pp.25 ～ 39、1975
39）住田昌二：集合住宅における住様式の発展に関する研究、新住宅普及会住宅建築研究所報、No. 5、pp.121 ～ 139、1978、同 No. 6、pp.233 ～ 247、1979
40）扇田信、西村一郎、今井範子：住様式に関する研究、新住宅普及会住宅建築研究所報、No. 5、pp.47 ～ 70、1978、同 No. 6、pp.33 ～ 51、1979
41）鈴木成文、初見学：住居における公室の計画に関する研究、新住宅普及会住宅建築研究所報、No. 8、pp.119 ～ 132、1981
42）松原小夜子：洋風居間のインテリア類型と居住者属性及びインテリア情報との関係－洋風居間の地位表示性に関する研究　その１－、日本建築学会計画系論文集　No.469、pp.65 ～ 76、1995.3
43）沢田知子：住戸平面の特徴および居住者属性の変化からみた住まい方の経年変化－二段階供給方式による集合住宅の居住過程に関する研究　(1) －：日本建築学会計画系論文集　NO.493、pp.99 ～ 108、1997.3
44）沢田知子：「内装譲渡方式」およびインテリアの個性化傾向に関する考察－二段階供給方式による集合住宅の居住過程に関する研究　(2) －：日本建築学会計画系論文集　No.505、pp.83 ～ 90、1998.3
45）沢田知子：集合住宅の公室における日常・非日常生活の展開について－起居様式の動向および行動拠点の構成から見た行動環境としての住居の考察　その１－、日本建築学会計画系論文集　No.511、pp.83 ～ 90、1998.9
46）沢田知子：集合住宅における就寝・私的生活行動の展開について－起居様式の動向および行動拠点の構成から見た行動環境としての住居の考察　その２－、日本建築学会計画系論文集　No.520、pp.115 ～ 122、1999.6
47）山崎さゆり、髙橋公子：時間量による生活の類型化－生活時間からみた行動と滞留空間の対応関係に関する研究　その１－日本建築学会計画系論文集　No.491　pp.67 ～ 74、1997.1
48）山崎さゆり：行動類型と空間類型の対応関係－生活時間に基づく住居内の行動と空間の対応関係に関する研究　その２－、日本建築学会計画系論文集　No.504、pp.111 ～ 118、1998.2
49）山崎さゆり：生活時間のタイプ別事例分析－生活時間に基づく住居内の行動と空間の対応関係に関する研究　その３－日本建築学会計画系論文集　No.538、pp.61 ～ 68、2000.12
50）伊東康子：ハウジングにおける家族モデルの再検討－その脱近代化をめぐる一考察－、都市住宅学 11 号、pp.32 ～ 37、1995.9
51）加茂みどり、髙田光雄：実験住宅ＮＥＸＴ 21 におけるライフスタイル提案住戸の住まい方と評価、日本建築学会学術講演梗概集 E- 2、pp.301 ～ 302、1996.9
52）加茂みどり、髙田光雄：実験集合住宅ＮＥＸＴ 21 における住まい方に関する調査研究、都市住宅学 15 号、pp.245 ～ 248、1996.9
53）加茂みどり、髙田光雄、鈴木克彦、河辺聡：実験集合住宅ＮＥＸＴ 21 における住まい手と住まいの相互浸透性、日本建築学会学術講演梗概集 E- 2、pp.317 ～ 318、1998.9
54）加茂みどり：実験集合住宅ＮＥＸＴ 21 における住まい方とその経年変化に関する調査研究、都市住宅学 23 号、pp.100 ～ 103、1998.9

（2005年３月９日原稿受理，2005年７月11日採用決定）